



Title	臨床哲学ネットワーキング 分科会 PE班ワーキングペーパー
Author(s)	
Citation	臨床哲学. 2013, 14(2), p. 84-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24728
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨床哲学ネットワーキング 分科会 PE 班ワーキングペーパー

目次

1. まえがき	85
2. 中之島哲学コレージュ	86
2.1. 概要報告	86
2.2. 臨床哲学と PE	87
2.3. 哲学カフェ参加者から見た、中之島哲学コレージュの PE 的なところ	88
3. 哲学カフェ・オルタナティブ	89
3.1. 思考する環境を問い合わせ——哲学バルから実験哲学へ	89
3.2. 哲学窯炉裏端	91
4. 哲学セミナー「あなたの身近な公共性 2 地域猫」企画準備中の会話から	93
5. ドイツにおける PE	95
6. 公共哲学と PE	96
7. わたしと PE	98
7.1. わたしはなぜ公共について考えてこなかったのか	98
7.2. まだ engagement していない「わたし」から PEへの問い合わせ	99
7.3. わたしは PE について何を考えたいか	99
8. PE 班活動にまだないもの、欲しいもの	100
8.1. 「組織論」「ネットワーク論」にとり組もう	100
8.2. PE 班の特色を「思想」にしたら	101
8.3. 「足元」で活動しよう	101
9. PE 班の今後	102

1. まえがき

このワーキングペーパーは、大阪大学臨床哲学研究室で金曜日 6 限目に開講されている授業のなかで組織されたパブリック・エンゲージメント分科会（通称 PE 班）に所属するメンバーが共同で執筆したものである。執筆者は、臨床哲学・倫理学の教員である中岡成文、同大学院・学部に所属する川田有希、小菅雅行、鈴木徑一郎、田口了麻、豊島史彬、フランツィスカ・カッシュ、および森本誠一、それから次節で紹介される中之島哲学コレージュの参加者で現在は PE 班のメンバーでもある石谷真の 9 名である。

このワーキングペーパーで取り上げるのは、主に、PE 班が今年度行なってきた活動の報告、反省、および今後の展望についてである。海外の PE、メンバー同士の相互インタビュー、メンバーにとっての PE、あるいは実験哲学や公共哲学と PE などの項目があり、本ワーキングペーパーの内容は多岐にわたっている。

さて、PE についてここで少し説明しておきたい。PE は 1990 年代後半から英国を中心として広がってきた概念で「公衆関与」あるいは「公共的参加」などと訳されている。ただ、これといった訳があるわけではないので、私たちはそのまま「パブリック・エンゲージメント」と呼んだり、英語の頭文字をとって単に「PE」と呼んだりしている。PE は専門家や専門的知識を有すると考えられている大学その他の研究機関に対する不信をなんとかしようと始まったもので、私たちの生活に直接影響を及ぼすような公共的な問題については、専門的・科学的にどうなのかということよりも、私たち自身がどうしたいのかを大事にしようとするものである。公共的（パブリック）な問題に公衆（パブリック）たる普通の市民が関与するというのはごく当たり前のことのように思われるかもしれないが、少なくとも日本では公共的な問題の多くが市民のあざかり知らぬところで決まっているのではないだろうか。

英国では BSE 問題で科学者に対する不信が高まったという反省から PE の必要性が訴えられるようになってきたが、日本の場合はどうだろうか。気候変動、生物多様性、原子力発電所といった広く科学技術に関わる問題、取り調べの可視化や死刑存廃など司法に関わる問題、あるいは憲法改正や TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）に参加するかどうかといった政治的・経済的問題について、私たち市民はどれほど関与しているだろうか。英國以上に日本では PE に積極的に取り組む必要があるのではないだろうか。

（森本誠一）

2. 中之島哲学コレージュ

2. 1. 概要報告

2012年9月21日の金曜、PE班は京阪電車中之島線「なにわ橋駅」の地下1階に位置する「アートエリアB1」にて、「あなたの身近な公共性」と題した哲学セミナーを開催した。時間は19時から21時までの2時間で、前半は森本が話題提供のプレゼンを行い、後半は鈴木が司会を務め、フロアの一般参加者の発言を中心に、PEに関する対話を行った。参加者は32名であった。

話題提供のプレゼンテーションでは、「PE」という言葉の基本的な意味と、イギリスにおける実際の取り組みが紹介され、「身近なところではどんな公共的問題があるだろうか?」という問い合わせが参加者に対して投げかけられた。

この問い合わせに対して、参加者からは多種多様な論点が提示された。具体的には、私的な空間と公的な空間、いじめ、公共と芸術、公衆トイレ、出生前診断、税金の受益配分、文化へのアクセス、ACTA、在日外国人と移民、地域猫、中絶と臓器移植、生命の尊厳への意識、中央対地方、当事者性と想像力、個人情報保護法、声の上げ方、といった論点が挙がった。これらの個別の話題についてあまり深く掘り下げることはなかったが、関連する発言数が比較的多かった地域猫の問題については、2013年2月に開催予定の哲学セミナーにおいて中心的に取り上げられることとなった。

上記のようなさまざまな論点が取沙汰されたのち、議論はPEそのものに対して向かれていた。PEを推奨することの意味やPEの定義そのものが議論され、「このセミナーのような、何かを伝えたり考えたりする場を作ること自体がPEである」という意見も提示された。

参加者からの発言にもあったように、こういった場を提供すること自体がPEであるというのであれば、このような活動を継続的に行なうことが今後PE班にとっての重要な課題の一つとなるだろう。

(小菅雅行)

2.2. 臨床哲学と PE

ここで私の提示する問題は PE の問題であり、臨床哲学の問題でもある。昨年 9 月に開催された中之島哲学コレージュ「あなたの身近な公共性」に参加した私は、反原発デモの例をあげ「市民がただ（公共的なことに）参加するのではなく、どのように参加するのかが重要なのではないか」と発言した。専門知識のない市民が原発のような事柄に関し意思表示をすることは、間違いなく PE の一つの形であろう。しかし反原発デモの報道を見ていると、インタビューに対し「ちょっとツイッターで見かけたので来た」というように、まるで近所の祭りに来ているような口調で答える者もいる（もちろん中には真剣な気持ちで活動している者も大勢いるはずだが）市民はどのような態度で PE に臨むべきなのだろうか。私が思っているのは、知識がなく、また知識を得ようとせず（問題に関して正しく理解しようとせず）、声をあげるだけでは望ましい PE にはなり得ないのではないかということである。

これは臨床哲学が抱えている問題でもあるだろう。臨床哲学の活動は教育や医療等の現場と関わる。しかし、一部の社会人院生を除き私達はその現場での専門的な知識を持たず、また実際に現場で行動を起こす立場にあるわけでもない。さらに、今後 PE に関する具体的な事例を取り上げて哲学カフェなどを開催する場合、ファシリテーターである私達はどうにして様々な問題と関わってゆくべきなのだろうか。既に今年の 2 月に、「地域猫」に関するセミナーを行うことが決定している。会場を仕切る私達臨床哲学の者は普段から地域猫活動に参加しているわけでもなく、アニマル・ウェルフェアのような動物に関する研究をしているわけでもない。私達はどうするべきか。ある程度勉強することは必要であろう。しかし付け焼刃の知識には限度があり、それだけで様々な分野の専門家のようになるはずがない。実際に活動や研究を行っている人々の話にしっかりと耳を傾けることが必要になるだろう。

PE は専門家から非専門家への一方的な知識の押し付けに異を唱えることから始まった。確かに専門的知識が権力化すれば非専門家の意見を反映させる余地はなくなってしまうだろう。とはいえ、何かを考える上で知識を持つ者と持たない者の間に大きな壁があることは事実である。知識は権力として振りかざされるべきものではないが、具体的な問題について判断する上で正しい知識は絶対に必要なものである。適菜収¹は無知な大衆の熱狂が物事を動かすことの危険を示唆し、正しい知識に基づかない民意の暴走を防ぐべきであると主張する。「素人は口出しそるな！」という彼の考え方は極端ではあるが、考えなしに

ただ参加すれば良いのではないという点においては一理あるだろう。声をあげ行動することばかりが重要なのではない。じっと腰を据えて話を聞き、学び、考えることこそが、PE のそして臨床哲学の第一歩なのではないだろうか。

(川田有希)

2.3. 哲学カフェ参加者から見た、中之島哲学コレージュの PE 的なところ 哲学カフェは、どの程度 PE か？

1. 一般参加という意味で考えた PE では。

A. 場所（トポス）としての PE。

昔。井戸端。縁側。病院の待合室。

1980 年代。ホテルのロビー。映画館。（悪女。中島みゆきより）

現代。ネットカフェ。ドリンクバーのあるファミレス。コーヒー飲み放題のファストフード店。

流れとして、集団から個へ向かった。

昔から続いている PE 空間は、図書館。公民館。晴れた日の公園。

B. 道路（パサージュ）としての PE。

商店街。街頭。駅前。歩行者道路（プロムナード）。不特定多数の行き交う所。

2. 中之島哲学コレージュの PE 性とは。

そこは場所としての公共性と、道路としての公共性を、両方持っていると私は考える。

それはアートエリア B1 が、打ちっぱなしの壁の未完成っぽい空間であることと、駅構内という、みんなが利用する空間で行われているという理由からであると思う。

特徴としてその集まりは、カオス的ではなくシステム的である。その理由は時間とテーマが決まっているからだ。出入りは自由。年齢制限等は特になし。飲食が NG という訳でもない。駅に行く身だしなみさえ出来ていれば、割と快適に過ごせる空間である。

集団的な PE 空間ではあるが（30 名から 50 名と定員が決まっている）連帯感は、私はあまり感じない。

それからカフェマスター及び進行役が場を取りなして、秩序と平和を保っている。参加者の政治信条からすると、それはプチ社会と言えるくらい多様である。その多様性が一般参加者に安心感を与えている。

以上が哲学カフェ参加者から見た PE 的な視点である。

(石谷真)

3. 哲学カフェ・オルターナティブ

3.1. 思考する環境を問い合わせ——哲学バルから実験哲学へ

私たちはものをかんがえるのは、ひとりであれ複数人であれ、ある特定の環境のもとににおいてであることは明らかである。そして、どのような環境においてものをかんがえるかを選択することが、私たちの思考方法に大きな影響をあたえるということは、おそらくは察しがつきやすいことである。これまでの哲学は、しかしながら、ものをかんがえる環境にあまり注意を払ってこなかった。本項目のねらいは、2012年10月6日に大阪・長居にて行われた「哲学バル」を、現代哲学の新しい動きである「実験哲学」に言及しつつ報告することにある。

今回はじめて行われた「哲学バル」とは、PE班の複数人のメンバーが、2012年10月6日に大阪・長居で開催された「まちなかバル」²に参加し、5つの店を渡り歩きながら哲学的な議論を行ったという実験的な試みを指す。そもそも「バル bar」は、スペインやイタリアにおいて軽食やお酒を提供する場を指し、それを背景に成立した「まちなかバル」は、バル街に見立てられた、特定の地域全体のお店をめぐるイベントである。また、まちなかバルでは、並行して社会的な活動が行われることもある。たとえば、今回の長居バルにかんしては、バルイベント開催前には、長居周辺のゴミ拾いを行う「ながいクリーン大作戦」が、イベント当日には、ペットボトルキャップを集めてワクチンに変えるエコキャップ活動が同時開催されていた。

今回の哲学バルは、とりわけ中之島でこれまで行われてきた哲学カフェと比較された場合には、次の2点において特徴的である。第一に、哲学バルにおいては、食べ物を口にしたりお酒を飲んだりすることが決定的な役割を果たしている。これは、哲学カフェにおいては、参加者がイベント中ではコーヒー やお茶を飲む程度である状況とは対照的である。そして、食べたり飲んだりすること——少なくとも、そのような環境が整えられているこ

と——は、参加者の身体に大きく作用し、さらには、参加者による話し合いの方向性に直接的な影響をもたらす。たとえば、日頃はほとんどお酒を飲まない私は、今回の哲学バルでは、多量のお酒を摂取したがためにかなり饒舌になり、バルの前半での議論の形成に大きく関わった。

第二に、哲学カフェでは話し合いの場は終始同じであるのに対して、哲学バルでは、議論の場は変化してゆく。いいかえれば、参加者はまちなかバルのルール上、ひとつの店に長居することはできず、次の店へと移動せざるをえない。この点については、議論の場が次々と変化してゆく哲学バルにおいては、ひとつのトピックに関してじっくりと話し合うことはできないのではないかというひとがいるかもしれない。しかし他方において、哲学バルは、さまざまなトピックについて話し合う可能性や多くの人たちが話し合いに参加する可能性を開いているといえる。

本項目はここで、現代哲学の新しい動きである「実験哲学 experimental philosophy」に言及することにする³。実験哲学は、人間のかんがえかたが条件によってどのように変化するかを認知科学の手法に基づいて調査し、さまざまな哲学的問題に対する新しいアプローチを模索する近年の試みである。さて実験哲学の研究によって、どのような環境におけるかによって人間のかんがえかたは大きく変わることが明らかになっている。ある実験によると、ある道徳的な質問に対する判断が、被験者がその質問を整理整頓されたテーブルで回答するのか、それとも食べ物などが置かれた雑然としたテーブルで回答するかによって大きく変化したそうである。

今回の哲学バルは、言及されたその2つの特徴が示すように、人間がものをかんがえる環境に問い合わせるという点において、実験哲学の動きと共通している。もちろん、実験哲学者たちは、実験を行う側として被験者には決してならずに、客観的に実験を行おうとするのに対して、今回の哲学バルにおいては、そのような配慮はなされていない。これは、哲学バルを今後行ってゆくにあたってさらなる考察が必要となってくる点と思われる。

まとめると、本項目は、長居での哲学バルという試みを、現代哲学の新しい流れである実験哲学を視野に入れつつ報告したものである。もっとも、一般の人々が食事をとったりお酒を飲んだりしながら行う議論が、哲学的思考に慣れたPE班のメンバーのそれと比べて、どの程度深くなるのかについては疑問の余地があるかもしれない。

(豊島史彬)

3.2. 哲学囲炉裏端

■企画の概略

昨年の11月9日（金）、哲学カフェ・オルターナティブの企画第2弾として、第1回哲学囲炉裏端が行われた。元々この企画は、同年10月6日（土）に大阪は長居で開催された第2回長居バル（まちなかバル）への参加後、PE班内で「哲学パブ・囲炉裏哲学」構想⁴が持ち上がり、その実験の一つとして開催されたものである。使用可能な囲炉裏が置かれている場所で実際に囲炉裏を囲んで食べ物を炙り、飲み物を温めながら対話を行うという企画だけに、実現可能な飲食店を探すのは難航したが、幸い西天満にある「好日庵」⁵さんのご厚意により無事に開催することができた。ちなみに、当日は飛び入り参加も含めて合計で14名が参加し、2基の囲炉裏に分かれて議論⁶を行った。

■雑感

さて、今回議論、もしくは対話を行った囲炉裏端とは、一体どのような場所だっただろうか。紙幅の都合上、ここでその詳細を全て語ることはできないため、ここでは主観的記述であることをお断りしつつ、筆者である私が感じたことを書き連ねてみたい。

結論から言えば、囲炉裏端で行う議論は、私からすれば片手間を伴うものだった。たとえば、いわゆる哲学カフェでは飲食物の用意は議論の妨げにならないよう、必要最小限に留められている。これは、議論の展開においてなるべく余計なバイアスを排除し、議論に集中できるようにするための工夫であるのだが、これに対し哲学囲炉裏端では、ただ単純に議論をするだけではなく、自分達で用意された肴を炙り、酒は燶をつける必要があった。あまり議論に集中し過ぎると、肴は焦げ、酒は熱が入り過ぎてしまう。食べ物にせよ飲み物にせよ、その時に進行している話に耳を傾けつつ、誰かが時々に様子を見て食べ頃や飲み頃をそれぞれ見極めなければならず、また、店内には暖房器具と呼べるものは2基の囲炉裏しかなく、さらには11月にもなると夜は厳しく冷え込むため、調理用も兼ねている火種⁷を絶やさぬよう気も配らなければならなかった。

このように書くと、なんと面倒なんだろう、と思う人もいるだろう。確かに、哲学囲炉裏端では哲学カフェとは異なり、議論に入り込むということは難しいかもしれない。私が哲学囲炉裏端を「片手間を伴うもの」と言ったのは、こういう議論以外にやらなければならないことの多さゆえだ。しかし、この片手間を伴う場とそこで過ごした時間が、私にとっては案外と心地の良いものだった。議論と並行して「それ(肴)、もういけますよ」や「ちょっ

と、そっちのお酒とって」といった会話が交わされる。肴の炙り具合や酒の燶具合はその場その場で気が付いた者がそれぞれチェックし、他方、語り手は飲食をしながら、という人もいれば、熱が入ってそれらを忘れている人もおり、中には、暖が近いせいか多少酔いが回り、いつもとは少し違う顔を覗かせている人もいた。議論にはファシリテーターがいたものの、あくまでも議論の進行役であり、囲炉裏端という場自体は誰が仕切るというわけでもない。加えて、片手間を伴うがゆえに議論の最中でも先述のような会話が交わされる。にもかかわらず、囲炉裏端には囲炉裏を起点とした人と物の調和があり、さながら共同体のように感じられた。私が感じた心地良さが、はたしてこの場と会話の間の相乗効果によるものなのかまでは断言できないが、少なくともあの囲炉裏端にはこれまでの哲学カフェ等では感じることのなかったある種のまとまりが、より細かく言えば誰かと同じ場所で何かと一緒にする実感のようなものがあった。

■振り返って思うこと

以上、哲学囲炉裏端について私なりに振り返ってみた。同じ場所で誰かと何かを一緒にするという点では、哲学カフェも哲学囲炉裏端も同じかもしれない。だが、前者が極論を言えば議論以外のことはしなくてもいい場であるのに対して、後者は議論以外にも様々なことをする必要があり、この違いが、その場にいる実感、その場で誰かと何かを一緒にしている実感を、私に感じさせたのでは、と考えている。確かに哲学カフェもそれはそれで面白いだろう。しかし、話し、聞き、考えるだけでは何処か手持ち無沙汰になってしまふことも時にある。そして、そういう時に新しい場面を作るのが、今回生じたような「片手間」ではないだろうか。考えてみれば、日常生活において考えることだけをする機会というのはなかなかない。むしろ、何かをしながら考える、考えながら何かをすることの方が大半だろう。つまり、何かをしながら哲学をすること、何かをしながら議論をすることは別におかしなことではなく、むしろ当たり前のことをしているに過ぎない。そう考えると、今回の哲学囲炉裏端は日常生活の場における議論の、ひいては哲学のやり方を考える一つのきっかけであると言えるだろう。

(田口了麻)

4. 哲学セミナー「あなたの身近な公共性 2 地域猫」企画準備中の会話から

鈴木から石谷へ：

テーマが決まった。「地域猫」は面白いテーマ。地域猫というのは、飼い主のいない猫を、「ノラ猫」ではなく、地域の住民としてとらえていう。今回は、やはり地域の猫と人間の「共生」というのが議論の軸になるんじゃないかと思うのだけれど、対話の場を準備する側として、猫好きの方や利害関係者以外の方の意見や感触も聞けるようにできたらと考えている。というのは、地域猫というのは身近な問題のようで、私自身はコミットしていない。猫を眺めるのは好きだけど。これくらいの立場の人って少なくないとおもうので、そういう人々にも意味のある場にしたい。PE的問題として、身近だけど気にしているものって多くあるはずなので、そういう問題の取り扱い方の一例としても、今回のテーマは考えられると言おう。そんなことを考えているんですが。

石谷から鈴木へ：

僕は、猫を飼ってるけど、地域猫はあまり好きじゃない。飼い猫とどう違うかというと、まず、ヒトに馴れていないから攻撃的である。それに汚い。触ると痒くなる。小さいうちにはいいけど、大きくなったら、可愛くない。地域猫が、住民に愛されるためには、いくつかのハードルがあると思うけど、どう思いますか？

鈴木から石谷へ：

猫好きだから、猫を飼っているからと言って地域猫も好きとは限らないですね。でも、愛さずとも共生はできるんじゃないかともおもうのだけど。人間同士が共生しているくらいには。住民みんなが地域猫を愛するというよりも、排除とまではいかないようなところまで持つて行ければいいのでは。

石谷から鈴木へ：

地域猫の問題は、ホームレスの問題と近いと僕は思います⁸。愛を持って接したとしても、隣りにいられると、臭いがちょっとという感じとか。どこを住み家にしているのかとか。雨の日はどうしているかとか。つまり、猫なりのQOLを、どう維持させるかということです。ガリガリで、今にも死にかけなのかどうか、こころがすさんでないかどうかとかで

す。共生は、こころにお互いゆとりがないと、難しいと思いますが。

鈴木から石谷へ：

僕は普段、地域猫ともホームレスともかかわり合いなくいるから、その辺の「隣にいられる」リアリティーがない。一番身近なところでは大学か。大阪大学の豊中キャンパスの「猫の糞尿被害がありますので、餌やり・水やり・寝床設置などを禁じます」との掲示を森本さんが教えてくれた。掃除とかする側の立場からすると、大変なのかもしれない。でも、猫を飼う余裕の無いキャンパスというのも寂しいと、僕はおもう。大学には美しい場所ばかりでなくて、よどみ、とか、たまり、とか、くらがり、とか、その中のちょっとしたひなた、みたいな場所があってほしい。これ、かかわらずにいられるキレイな場所を持っている人間の勝手な言葉かもしれません。しかし、キャンパスは、建物の中が清潔ならそれでいいと思うのだけど…外はある程度落ち葉なんかも散らして、風流な感じで。歩くのには注意が必要なくらいの感じで。

石谷から鈴木へ：

外側から見た地域猫の様子と、実際上の地域猫のあり様は、違うかもしれないですね。だから実際は、いろんなとこを、もっと考えられているかもしれない。ただ、好き嫌いは主観なので、どんなにちゃんとあっても嫌いなヒトは、嫌いでしょうね。たとえ地域猫がいたほうが、良い場合があったとしても。例えば、ほかの害獣を追い払ってくれたとしても。でもそういう益獣としての地域猫を、考えることができるような気もする。

次のステップへのトピックス

- 地域猫の役割・害
- 地域猫問題に対するさまざまな立場・距離
- 地域猫に対する好き嫌いとその理由
- 共生のための余裕とは
- 猫の QOL はどうすればあがるのか
- この会話で考えられていないことはなにか

(鈴木径一郎・石谷真)

5. ドイツにおける PE

ドイツでは 1999 年に PE を特徴づけるできごとがあった。当時のドイツでは、遺伝子工学や幹細胞研究の議論が公的に注目を集め、社会との対話の必要性が明らかとなった (WiD b)。

まず、ドイツ科学助成財団連盟が発意した「PUSH (Public Understanding of Science and Humanities) 覚書」が調印された。PUSH 覚書は、社会と学術との対話を奨励するために対話に向けて積極的に取り組む研究者を支援するよう求めている (WiD a)。非専門家にも理解できるように研究の過程や成果を説明することは、研究者としての評価を下げるどころか、むしろ研究者のるべき姿として、適切な位置を与えられるべきであるとされる (同上)。大学や研究所は社会と学術との対話を可能にするための基盤を整え、研究の過程や成果を公的に提示できるよう研究者を育成すべきである (同上)。

また、PUSH 覚書を実施するために「対話する学術」(Wissenschaft im Dialog/WiD) という組織が設立された。

そして、WiD が「学術の年」(Wissenschaftsjahr) を宣言することとし、2000 年は初めての学術の年として「物理学の年」とされた。

学術の年とは、毎年異なるテーマを中心に学術と社会を繋げようとするものであり、大学や研究所が、例えば、誰でも参加できる講義、ワークショップ、ディスカッション、サイエンス祭りなどのイベントを行う。好評のため翌年以降に継続されるイベントもある。例えば、2001 年から行われている「学術の長い夜」(Lange Nacht der Wissenschaft) は、多くの都市で毎年行われるイベントとなり、2004 年からはオーストリアにも普及している (BMBF 2009:7)。

2007 年には「人文学の年」として文系の分野が中心となったが、これまで実施された学術の年のテーマは物理学を始めとしてすべて理系の分野であった。これは学術の年において行われるイベントを通じて若者が理系の分野への関心を高めることも、学術の年の目的であったからである (WiD b)。WiD の最初の会長であった Joachim Treusch 教授(同上)によれば、物理学の年のあとは、物理学の勉強をはじめる学生の数が確かに増加した。

学術の年を支援するのは、WiD に協力している科学助成財団とドイツ連邦教育研究省であるが、イベントの実施と内容は完全に研究者に委ねられている (BMBF 2009:7)。しかし、研究者側には、市民向けの理解しやすいイベントをやれば、他の研究者から程度が

低いとみなされるのではないかとの不安もあった(BMBF 2009:9)。また、メディアからは、あるイベントは面白すぎて学術にふさわしくないという批判もあり、学術はどれぐらい真面目でなければならないかという議論が起こった (BMBF 2009:7)。

結果としてドイツでは、学術の年によって学術についての社会への情報提供が増加した (WiD b)。このことは新聞で学術的なテーマについてのページ数が増え、テレビでは学術的なテーマを扱う番組が増えたことに表れている (同上)。とはいえ、PUSH 覚書はたんに社会への情報提供にとどまらず社会との対話も求めている (BMBF 2009:48)。しかし、この目的は学術の年の最初の 10 年間においてはほとんど達成できなかった (同上)。そのため、2010 年からは学術の年は特定の専門分野ではなく、エネルギー問題や持続可能な開発といった社会問題をテーマとすることとなった (同上)。そして、イベントとしてはディスカッションやサイエンスカフェなどの対話が可能なものを増やしていくこととなった (同上)。また、学術の社会との対話は学術の限界も示すべきである (BMBF 2009:23-24)。というのは、学術が進行すれば、どのような問題でも解決できるということではなく、問題は社会とともに発展するのであり、社会との対話が学術には必要であるということを伝えなければならないからである (同上)。すなわち、学術の発展を積極的に批判する社会と、その批判を受け入れることができる研究者の育成が必要なのである (同上)。

(Franziska Kasch)

6. 公共哲学と PE

PE という視点から公共哲学を考えた場合、「公共空間」についての議論は不可分なものと言えるだろう。人々が分け隔てなく一ヶ所に集まり、思想信条・社会的地位・出自・ジェンダー、あるいは国籍等の属性の違いにかかわりなく、パブリックな事柄について自由闊達に、しかしそれぞれの人格を尊重し、討議のルールを守りつつ、議論をかわし、そこから共同の意志と行動が生まれるような公共空間を創出することは、現代社会についても一定の価値が認められる。とりわけ現代において公共空間は市民相互の公共性が具体的に生成される場であるという点において、もはや政府等の独占物ではなく、民間、とりわけ市民社会もその担い手になり得るし、またなるべきであるという視点からも新しい公共性の政治哲学についての議論にも適うものである。

昨今では、NPO 事業やソーシャル・ビジネスが注目を集め、『社会のお医者さん』の

養成」を理念に掲げ、ソーシャル・イノベーション（社会変革）という視点から公共性を考える取り組みが、私学の大学院などでも展開され、社会人大学院生などを中心に人気を博している。しかし、こうしたソーシャル・イノベーションについての、とりわけ実践領域での活動は、哲学的にはハーバーマスの『公共性の構造転換』で公共空間の「基本構造」における議論からみれば、確かに今日的な社会のあり方を考察する有意味な端緒となり得るものと言えるだろう。

市民的公共性は、さし当り、公衆としての集合した私たちの生活圏として捉えられる。これらの私人たちは、当局にとっては規制されてきた公共性を、まもなく公権力そのものに対する抗して自己のものとして主張する。（中略）民間人は私人である。したがって彼らは『支配』しない。それゆえに彼らが公権力に対して突き付ける権利要求は、集中し過ぎた支配権を『分割』せよというのではなく、むしろ既存の支配の原理を掘り崩そうとするのである。市民的公衆がこの支配原理に対置する監査の原理が、まさに公開性なのであって、これはもともと支配そのものの性格を変化せしめようとするものなのである。⁹

ハーバーマスのこうした「基本構図」では「私人 (Privatleute)」が「公衆 (Publikum)」として集合することが市民的公共性の出発点となる。逆に言えば、公衆として集合しなければ、私人が何人集まろうとそこからは市民的公共性は生まれてこないということになる。では「公衆」とはどのような存在なのであろうか。『公共性の構造転換』に最初に「公衆」が登場するのは「公共性の主体は公論 (die öffentliche Meinung) の担い手としての公衆」である。公論とは個人的な事情や事件ではなく、当該社会の不特定多数の共通の利害に関わる事柄について論じることであろう。とすれば「公衆」とは共通の、あるいは社会的かつ公共的な問題について、自らの利益のためではなく、その一般的もしくは普遍的な解決を視野に入れて、相互に議論し合う、それゆえに議論能力のある人々というように、敷衍して理解することも、あながち間違いではあるまい。

この「基本構図」で次に注目したいのは、「集合 (Versammlung)」という用語、ないし概念である。人間のコミュニケーション手段は、文書や表情、身振り手振り等であるが、もっとも基本的なものは音声による言語的コミュニケーションである。今日では、インターネット上のスカイプ機能もあるが、そうした最新の機能はすべて相手の表情を媒介させて

くれるものである。こうしたコミュニケーションは人々が特定の物理的空间に、あくまで一ヶ所に集合しないと成立しない。こうした空间こそがハーバーマスのいうところの「生活圈(Sphäre)」なのである。ハーバーマスはホップズの言葉を入れ替えて、「権威ではなく、真理が法を創る (veritas non auctoritas facit legem)」と諧謔的に表現しているが、続けて、「公の場での議論は意志を理性に変えるはずのものであった。その理性とは、普遍的な利益のために実際に必要なものに関する合意を私的な意見が公の場で競い合うことであきらかになるようなものであった」¹⁰と述べている。そこにハーバーマスが合理的な議論によって理性が生まれるという確信を見て取ることができる。ハーバーマスは、公論に階級的支配の契機を見抜いてはいたものの、その公論を生み出す市民的公共空間に、それ自身の主張の理念を、真実味をもってその客観的意味として取り入れる政治的制度を発達させたことは注視に値する。今日の間接民主制の政治的意思決定において十分に咀嚼され得ない問題に対して、PEについての思考様式は政治哲学的な意味合いを、制度の境界から開かれたものとして再帰的に議論し、議論が社会的実践への端緒となる実践哲学の復権をも含意するものと解することができよう。

以上から、ハーバーマスの公衆と公共空間についての議論をまとめたが、それらの論点は、私がいかに公的な問題に能動的に関わるか、という意義そのものを問い合わせ試みであると言える。

(東曉雄)

7.わたしと PE

わたし（鈴木）について言えば、公共の問題に取り組んでみること、参与することについて、あまり意識的には考えてこなかったようにおもう。ここで、「わたしと PE」として、「公共」への、わたし個人のこれまでの視線について少々書いてみたい。「わたし」たちが集まるところに公共があるならば、個人的なことにふれることも無駄ではないだろう。

7.1.わたしはなぜ公共について考えてこなかったのか

ひとつは、公共の問題を身近な問題とは考えていなかったことだろう。公共の問題とは、それはつねに「大きな」問題のことをいうのであり、その対応はどこか遠くでおこなわれているものである、と考えていたふしがある。身近な公共性には、それとしては目を向け

ることはなかった。

なぜそうだったのか。基本的な生活の場が、家と学校だけだったからだろうか。学校はさまざまな公共性ある問題の場と考えても良さそうだが、「個人の集合」としか考えなかつたのか。ベッドタウンの集合住宅では、とくにコンフリクトはなかった。父母は、地域の外に勤めに出て、休日も地域の外に出かけた。地域についての話題にはあまり興味が無いようだった。一人暮らしをするようになって、税の問題が出てきても（そのためにおさら？）公共の問題とは、税金を支払うことであると考えていた。そして、両親にしても私にしても、できるだけ「公共」と関わること無く、あるいは関わっていないつもりで、（意識していたのは選挙くらいか）、問題なく暮らしていたのであった。

もうひとつは、公共の問題を、歯が立つ問題だと考えていなかったからだろう。いくらか「公共」的な問題に興味をいだくようになったのは、劇団の運営（小さな共同体である）ということを始めて、共同体に権利と力を持つ（そして決定には従わねばならない）一人となることを経験したからではなかったか。また、これはむしろ「身近さ」の問題もからむが、劇団として、身近な行政サービスを積極的に利用する主体にもなり（地域公民館の利用等）、そして、地域に影響を与え、反響を受ける主体となったからではないか（地域の子供たちの演劇サークル運営、地域イベント参加）。

7.2. まだ engagementしていない「わたし」から PEへの問い合わせ

わたしはどんな公共の問題に巻き込まれているのでしょうか？

わたしは、それに対して、どんな行動をとることができるでしょうか？

なぜ、わたしがその問題にとりくむのでしょうか？

それは、わたしひとりでもできることですか？

どこに入り口があるのでしょう？

そのほかにも、「わたし」たちの素朴な疑問は色々あるはずなので、それを聞き出すことも進めて良いだろう。

7.3. わたしは PEについて何を考えたいか

わたし（鈴木）はこれまで、個人研究として「閑暇」について考えてきたので、「PEと閑暇」ということについて考察を進めたい。

アリストテレスは閑暇を政治参加の条件であるとしている。このときの閑暇というのは、経済的余裕、時間的余裕くらいにもとれるが、公共性のある問題に参与するには、それだけでなく、むしろ、一種の「かまえ」が要るようにおもえる。それは、いうならば、その問題あるいはその問題を抱える共同体に「てまひま」¹¹をかけて取り組もうという態度である。そして、そこにはなんらかの「愛着」のようなものが働いているようにおもわれる。公共への関与における愛着がいかにして可能になるのかということを考えることは、ひとつの重要なPE研究となるのではないだろうか。

(鈴木径一郎)

8. PE班活動にまだないもの、欲しいもの

パブリック・エンゲージメント（PE）というコンセプトを聞いたのは初めてだった。「臨床哲学」でもそうだが、「それは何ですか」と問いただしても仕方がない——とは言わないが切りがないのは確かだ。面白い、いけそうだと感じたら、自分も参加して自分の感性を投入してみる。大きな事業というのは、意外とそのような「乗り」で実現してきたのではないか。

8.1. 「組織論」「ネットワーク論」にとり組もう

グループを組んで何か仕事を進めていくとき、必ず「組織論」に突き当たる。臨床哲学の金曜6限授業の、しかもPE分科会（班）という小さな単位に、組織論なんて大げさな——と思われるかもしれないが、どんなに小さな活動単位でもこの問題は避けられない。もちろん、金6であるならば、まずはメンバーの自主性を最大限尊重すべきだ。だからといって、そこにどんなリーダーシップもなくいいとか、この問題を考えなくてもいいとかいうことにはならない。変な「平等」の考え方、「横並び」の習性、そこから来る遠慮、そんなものはいらない。それぞれのメンバーが自分のもてるやる気と資源を投入して、活動を盛り上げるなかで、けん引役が向いている人もいれば、ふだんはついていくだけだが、時々意外な提言をして存在感を示す人もいる。互いの信頼感と、自分なりの貢献が出来ているという自信があれば、リーダーとフォロワー（ついていく人）の区別は、「差別」ではない。そう思うのだが、どうだろう？

しかし、組織論という言い方は古いかかもしれない。PE班や臨床哲学という組織の中だ

けで閉じた議論をするのも、つまらない。どうせ PE 班だけでできることはごく限られている。私は、「つながる」、「つなげる」、「つなげられる」について語ったことがある。自分たちで何かやるだけではなく、PE 的な志をもつ人やグループとつながったり、あるいはそのような人またはグループ A を別の人またはグループ B とつなげたりする。それ自体がりっぱな PE 活動ではないか。逆に、私たちが今いったような仕方で別の人またはグループにつなげてもらうことも、進んで受け入れたらいい。私たちのなかの誰かが「ハブ」になって、他のメンバーを学外の人またはグループと結びつけてくれてもいい（私は ALS の患者さんたちや京都の難聴の人たちについて、ハブ的な役割を果たす用意がある）。これはネットワーク論だ。

8.2. PE 班の特色を「思想」にしたら

パブリック・エンゲージメントという旗のもとで、ほとんどあらゆる活動が可能である。あまり可能性が広すぎて、かえって困る。そこで、臨床哲学の PE 班らしい活動は何か、どんな特色を打ち出すのかということが、重要になる。

これはもちろん、1 つのアイデアに過ぎないが、「思想」ということを考えてみたい。誰でも「思想」をもっている（参考：フロイトは「夢の思想」というふうに、私たちの夢を動かすごく素朴な思考や想念を、「思想」と呼んでいる）。臨床哲学には、それに加えて、伝統的な哲学・倫理学によって豊かにされた、臨床哲学の思想がある。私たち PE 班としては、一定の活動はもちろんするとして、PE というものの思想的部分をとくに意識し、そこを担当したらどうだろうか。

8.3. 「足元」で活動しよう

前述の通り、PE の活動範囲も原理的には無限に広がるが、あえて「足元」を見つめ直してみるのも一つのやり方ではないか。臨床哲学が大阪大学の組織である以上、大学そのものを PE 活動のフィールドと捉えてみたらどうか。

たとえばこんなこと。少し前から「地域猫」が私たちのテーマとして浮上してきた。大阪大学のキャンパスに猫たちがたむろし、えさやりをしている近所の（？）人がいるのは前から見かけていたが、最近はどうやら学生らしい人たちもえさやりに関与している。他方では、森本さんが発見したビラにあるように、大学管理者は猫のえさやりを苦々しく思っている。これは、目立たないが、大学を舞台にしたコンフリクト（抗争・葛藤）である。

足元といえば、豊中キャンパスの地元石橋も含まれる。石橋商店街とタイアップして盛り上げようとする阪大生の動きが前からあることは知っていた。文句ないPE活動だと思う。ところで、石橋駅西口改札を出たところに、最近「ビッグ・イシュー」を売っている人がいる。その（おそらくは）ホームレスの人が石橋という地域とどんなかかわりをもっているのかわからない。それでも、話してみたい、成り行きによればいっしょに哲学カフェを開いてみたいと、個人的には思う。商店街とホームレス。ずいぶん方向は違うが、どちらともコラボしたい。

(中岡成文)

9. PE班の今後

このワーキングペーパーの各項目を見ても分かるように、PE班と言っても決して一枚岩ではない。PEを試みたいフィールドや話題も人によって異なる。また、問題に対してもどのような肩書き（市民、専門家、etc）で臨むのかという姿勢もそれぞれで思うところがあるだろう。だが、少なくともPE班には人と人、人と場、場と場を繋げていくという目標が確かにあり、今回語られた種々の試みを通して、我々と我々が生きる世界との接点を繋げ直し、今、この時、確かに私たちは共にそこにいる、という実感を紡いでいけるのでは、と考えている。また、たとえば中岡さんの言っているような商店街とホームレスのコラボレーションや、カッシュさんのように国外に視点を向けたPE活動、さらにはこの春に梅田のグランフロント大阪にできるナレッジキャピタル¹²への関与等、まだ実行に移していない検討中の企画もある。個人的に付け足すなら、私としては人々が共有する「場」に対して、どのような共有の仕方があるのか、どうすれば共有しているという実感を生み出せるのかを考えていければと思う。

今年度のPE班の活動ももうまもなく一区切りを迎えるが、今年度の終了をもってPE班から、厳密には阪大から離れる人が結構いる。私はM2だが諸事情で来年度も残るため、こうして終わりの言葉を連ねているが、来年度のPE班はどうなっているのだろうか。色々と不安はあるが、ともかくまずはこのワーキングペーパーが無事PE班全員の力でまとまりたことを喜びたい。そして、来年度もこの活動を続けられることを願いつつ、そろそろ筆を置こう。

(田口了麻)

参考文献

- BMBF: Wissenschaftsjahre 2000 bis 2009. Erfahrungen und Perspektiven der Wissenschaftskommunikation. Bonn, Berlin 2009.
- WiD a: Das PUSH-Memorandum zum Auftakt der Initiative „Dialog Wissenschaft und Gesellschaft“. Published online, <http://www.wissenschaft-im-dialog.de/wir-ueber-uns/gruendung-und-geschichte/memorandum.html>, last access: 2012/12/18.
- WiD b: Interview mit Joachim Treusch „Die Welt hat sich geöffnet hin zur Wissenschaft“. Published online, <http://www.wissenschaft-im-dialog.de/wir-ueber-uns/10-jahre-wid/interview-mit-joachim-treusch.html>, last access: 2012/12/18.

注

- 1 日本の作家。著書に『日本をダメにしたB層の研究』『ゲーテの警告 日本を滅ぼす「B層」の正体』など。
- 2 正式名称は「長居バル」。今回は、2012年3月17日につづく2回目の開催であった。詳細については、<http://nagaibar.com/> (最終アクセス 2013年1月22日)
- 3 ここでの実験哲学に関する記述は、2012年11月1日に京都大学で行われた Steven Stich 教授による実験哲学に関する講義に基づく。
- 4 参考までに延べておくと、10月19日（金）のPE班プロトコルに「囲炉裏哲学の提案」という記述が確認できる。
- 5 残念ながら同店は昨年の大晦日をもって閉店した。
- 6 片方の囲炉裏では鈴木さんが、もう片方の囲炉裏（ちなみに私はこちら側の囲炉裏にいた）では小菅さんがそれぞれファシリテーターとなり、前者では「おちつくこと」や「沈黙」等、後者では「閉むこと」について議論がなされた。
- 7 余談だが、店内には照明は一応あるにはあったものの、いわゆる常夜灯よりもさらに暗く、照明の用をなしていなかったため、「明かり」と呼べるものもこの火種くらいしかなかった。
- 8 ホームレスネコという表現が横浜の地域猫活動の文章の中にある。
- 9 ハーバーマス『公共性の構造転換』細谷貞雄訳、1973年、未來社、46頁。
- 10 前掲書、113頁。

- 11 筆者も企画・進行役として参加した「ひま」をテーマとした哲学カフェ（とよなか国際交流センターにて 2012 年 1 月 21 日実施）において、その参加者から出た言葉。
- 12 詳細については <http://kc-i.jp/> を参照されたし。